



Title	エドゥアルド・ヴェルキン 『サハリン島』におけるサハリン表象
Author(s)	大谷, 梨乃
Citation	研究論集, 23, 187 (左) -210 (左)
Issue Date	2024-01-25
DOI	10.14943/rjgshhs.23.1187
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/91090">http://hdl.handle.net/2115/91090</a>
Type	bulletin (article)
File Information	11_rjgshhs_23_p187-210_l.pdf



[Instructions for use](#)

## エドゥアルド・ヴェルキン 『サハリン島』におけるサハリン表象

大谷梨乃

### 要旨

本稿はロシア文学におけるサハリン表象に対して、通時的かつ共時的な視点でアプローチするものである。19世紀末にサハリンに赴いたアントン・チェーホフは、『サハリン島』(Остров Сахалин, 1895)というルポルタージュにて、サハリンにおける監獄や流刑、住民の生活の実態を記述した。チェーホフの著作の影響は大きく、後にサハリンを訪れた作家などの旅行者たちにも、チェーホフの描いたサハリンが想起されたという。このような背景もあって、チェーホフの『サハリン島』によるサハリンのイメージについての研究は数多くなされてきた。同時に、チェーホフ『サハリン島』以降のサハリン関連作品は、何らかのかたちでチェーホフの『サハリン島』と関連づけられたり、それとの比較によって読解されたりしてきた。しかしながら、その影響力のあまり、チェーホフのあとに形成されたり変化したりしたサハリンの描写やイメージ、必ずしもチェーホフやその著作に関連づけられない点については、これまでほとんど注視されてこなかった。

チェーホフの『サハリン島』が発表された約130年後、奇しくもロシアで同名の小説が発表された。エドゥアルド・ヴェルキン『サハリン島』(Остров Сахалин, 2018)である。この作品にもチェーホフの『サハリン島』の影響が見られるが、ヴェルキンの『サハリン島』はジャンルとしては小説であり、さらに近未来のサハリンを描いた作品であるため、その内容については作者の想像による部分も大きい。ヴェルキンの『サハリン島』では、チェーホフ以降の時代状況もふまえられているのはもとより、チェーホフの『サハリン島』以降の作品で形成されてきたサハリン表象や、現代ロシア文学の潮流からの影響も見られる。そのため、この作品を読み解くにあたっては、通時的かつ共時的なアプローチが必要となってくる。

本稿では、サハリンを舞台にした作品に特徴的な監獄・流刑、開発・産業、自然、多様な民族状況などの描写やイメージが、ヴェルキンの『サハリン島』においてどのように利用されているのか、それによって近未来のサハリンが

どのように創造されたり表現されたりしているのかを探っている。また、そのようなサハリン表象がどのように形成され継承されていくのかについて、バフチンの時空間の概念も応用しながら検討している。加えて、従来のサハリン表象のみでは読解しにくい部分をも考察するため、ヴェルキンの『サハリン島』が現代ロシア文学のどのような潮流を受けているかにも目を向けて論じている。このように作品を通時的かつ共時的な視点で読み解くことで、サハリン表象の豊かさとさらなる可能性が明らかになるだろう。

## はじめに

アントン・チェーホフがサハリン島へ向けて出発したのは、1890年4月のことであった。彼は7月にサハリンに到着して約3か月間滞在し、さまざまな囚人や住民を調査した。それらをまとめた『サハリン島』が発表されたのは5年後の1895年である。チェーホフとおよそ同時期にサハリンに渡り作品を残した作家としてヴラス・ドロシエーヴィチやウラジーミル・コロレンコなどもいたが、天野尚樹によれば、サハリンの存在をロシア社会に知らしめ、イメージを抱かせる機能を果たした言説のうち、もっとも影響力の大きかったのはチェーホフの『サハリン島』であり、チェーホフが渡航した頃の帝政期サハリンの実態は、「流刑囚の植民地」というイメージとすでに乖離していたにもかかわらず、そのイメージに変化をもたらすには至らなかった<sup>1</sup>。さらにチェーホフの『サハリン島』の影響は、その後のロシアの作家や作品だけでなく、村上春樹など現代日本の作家やその作品にも及んだ<sup>2</sup>。このような影響力もあってか、チェーホフの『サハリン島』によるサハリンのイメージについての研究は数多くなされてきた。また、『サハリン島』以後に発表されたサハリン関連作品は、必ずと言ってよいほど『サハリン島』との関係性や比較によって読解されてきた。たしかにチェーホフの影響にも十分留意するべきだが、それによって監獄・流刑やそのネガティブなイメージ以外は遮蔽されてきた側面もあるのではないか。

チェーホフの『サハリン島』が発表された約130年後、奇しくもロシアで同名の小説が発表された。エドゥアルド・ヴェルキン『サハリン島』(Остров Сахалин, 2018)<sup>3</sup>である。この作品にもチェーホフ『サハリン島』の影響が見られるが、ヴェルキンの『サハリン島』はジャンルとしては小説であり、さらに近未来のサハリンを描いた作品であるため、その内容については

<sup>1</sup> 天野尚樹「サハリン流刑植民地のイメージと実態—偏見と適応—」『境界研究』1巻, 2010, p.116.

<sup>2</sup> 村上春樹は『1Q84』(2009)でチェーホフの『サハリン島』を引用したり、その内容を応用したりしている。

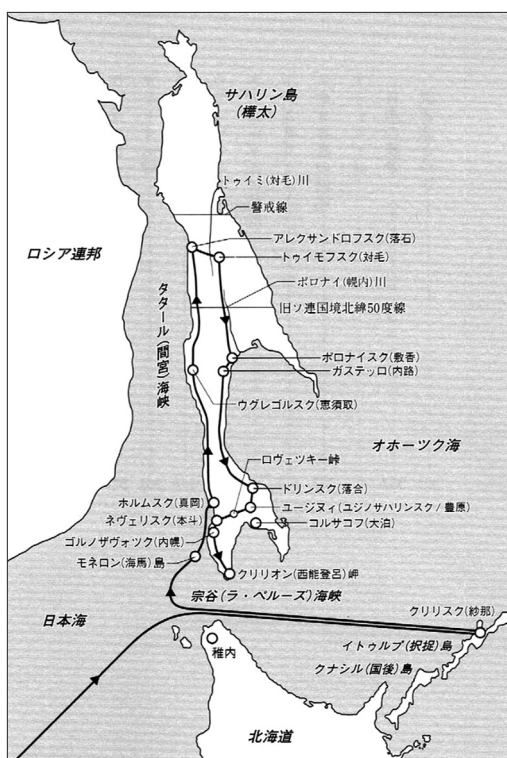
<sup>3</sup> 出典は以下のとおり。Веркин Э.Н. Остров Сахалин. М., 2018.

日本語訳は以下による：エドゥアルド・ヴェルキン(北川和美・毛利公美訳)『サハリン島』河出書房新社, 2020.

作者の想像による部分も大きい。ヴェルキンの『サハリン島』では、チャーホフが来島した当時のサハリンだけでなく、その後の時代状況や出来事もふまえられている。そのため、この作品を読み解くには、現在に至るまでのサハリンの状況やサハリン関連作品に見られるサハリンの表象と、この作品におけるサハリンの表象との関係性を論じる必要がある。そうすることで、ヴェルキンの『サハリン島』を讀解することはもちろん、サハリンがどのように描写されてきたか、サハリンのイメージがどのように形成されてきたか、それらの描写やイメージがどのように利用されてきたかをも提示することができるだろう。

### 『サハリン島』の世界観と創作の背景

ヴェルキンの『サハリン島』について、まずはこの作品の世界観、すなわち近未来の世界や近未来のサハリンを概観しておく必要がある。北朝鮮が米軍基地を核攻撃したことから第三次世界大戦が始まり、核大国や核保有国が核弾頭を打ち合った末にロシアのヨーロッパ部、西シベリア、中国、北米が全滅した。朝鮮半島に最後のミサイルが落ちた瞬間に大陸でMOB（移動性恐水病）という感染症が発生したとされる。第三次世界大戦後に復活した大日本帝国は感染症対策として鎖国体制を敷くこととなった。帝国大学の応用未来学研究者であるシレーニは調査のためにサハリン島へ赴く。ロシア政府が核戦争によって消滅したのち、サハリン島は大日本帝国の保護下に置かれていた。択捉島からモネロン島を経てサハリンの西海岸を北上し、東側を南下してクリリオン岬に至るまで<sup>4</sup>、シレーニとその案内役アルチョームらはさまざまな体験をする。島内ではウグレゴルスク、アレクサンドロフスク、ユージヌイ（ユジノサハリンスク）に刑務所があり、日本人の徒刑囚を収容していた。また、大陸から感染症を逃れてきた人々もおり、サハリンは居場所のない人たちを寄せ集めた島となっていた。また島では自然破壊が進んでいるが、エネルギー産業を発展させる試みもある。島には日本人のほか、中国人や



<sup>4</sup> シレーニらの行程は地図参照。画像引用元はヴェルキン『サハリン島』p.4.

コリアン、アイヌ、ロシア人などがおり、日本人の徒刑囚、刑期を終えた日本人やその他の民族からなる条件付き自由民、職務のために来島した自由民という階層に分かれている。シレーニは特権的な立場を利用しながら調査を進めるが、アレクサンドロフスク滞在時に大地震が起こり、刑務所から脱走した囚人との銃撃戦を強いられる。さらに地震がきっかけとなってサハリン島にも感染症が流れ込む。島から逃げようとする人々の渋滞にも感染症が広がり、シレーニらはゾンビのようになった感染者の群集と闘うことになる。なんとか群集を撒きクリリオン岬で救助船をつかまえたが、特権のある人物しか乗船できないため、シレーニは同伴者と離れないように別の船に乗ることを決める。そこでサハリンを浄化するために核ミサイルが発射され、シレーニはその放射線を浴びたのだった。

作者であるエドゥアルド・ヴェルキンは1975年にロシア連邦コミ共和国ヴォルクタで生まれた。ヴォルクタは1980年代まで収容所が実質機能していた町であり、「著者が極北の炭鉱や収容所の町出身であることは、本作の執筆に少なからず影響を及ぼしていることだろう」<sup>5</sup>と訳者の北川和美が解説している。また、タイトルからもわかるとおり、ヴェルキンはチェーホフの『サハリン島』を意識しており、この小説がチェーホフの著作から発展したものだとしている。とりわけ「語り手」という点から見ると、2つの『サハリン島』の構造や文体が一致していることがわかる。チェーホフ『サハリン島』の語り手が「私」すなわちチェーホフであるように、ヴェルキン『サハリン島』の語り手も「私」すなわちシレーニである。ネフスキーの書評によれば『サハリン島』は、「アントン・チェーホフの同名の旅行記をもとにした、一種の文芸ゲーム」であり、とりわけ小説の前半において「エドゥアルド・ヴェルキンはチェーホフのように慎重に文章を整えている。(中略)エドゥアルド・ヴェルキンは、文章をチェーホフのように注意深く様式化している」<sup>6</sup>。しかしながら、チェーホフ同様に外から来た観察者であったはずのシレーニは、次第にサハリンの奇妙な出来事に巻き込まれていき、「中盤でチェーホフの様式美は途切れる」<sup>7</sup>。このように、「私」という来訪者の一人称語りのかたちで、語り手を作為的に一致させておくことによって、未来のサハリンがさらにグロテスクなものとして印象づけられるのである。また、ヴェルキンの作品にはシレーニ以外の語り手も存在するうえに、作者によれば「信頼できない語り手」という文学手法が用いられており<sup>8</sup>、語り手ごとに部分的に異なる解釈や視点が並べられている。

ヴェルキンは好きな作家のひとりにチェーホフの名前をあげており<sup>9</sup>、「チェーホフはロシア

<sup>5</sup> ヴェルキン『サハリン島』pp.391-392（「訳者あとがき」より）。

<sup>6</sup> Невский Б. Эдуард Веркин. «Остров Сахалин». Постапокалиптическое путешествие со слабым привкусом надежды.  
[<https://www.mirf.ru/book/eduard-verkin-ostrov-sahalin/>]（2023/8/29 閲覧）。

<sup>7</sup> Невский. Эдуард Веркин. «Остров Сахалин»（前注6 参照）。

<sup>8</sup> ヴェルキン『サハリン島』p.399（「訳者あとがき」より）。

の作家にとって底なしの宝の山である」<sup>10</sup>と称賛している。作者本人の読書歴からもサハリンのイメージという点からも、チェーホフの影響は少なからず存在し、むしろヴェルキンはそれを利用しての側面も強い。とりわけ小説世界への語り手の吸収やフィクションらしさについては、チェーホフの『サハリン島』が土台にあることでより際立つ本作品の特徴であるともいえるだろう。ただし、小説『サハリン島』では、チェーホフよりあとに形成されたり発展したりしたサハリンのイメージも加味されているうえに、そもそもフィクションの世界であることが前提となっているため、すべてがチェーホフとの比較のみで読解できるわけではない。『サハリン島』にはサハリンに特徴的な描写やサハリンのイメージの影響が見られるが、一方で近未来という設定ゆえの独自性も見られる。以下ではこれまでのサハリン表象とも比較しつつ、サハリンに特徴的な描写やイメージが『サハリン島』においてどのように利用されているかについて論じる。

### サハリンを舞台にした文学作品

ヴェルキンの『サハリン島』におけるサハリン表象を論じるために、これまでのサハリン関連作品とサハリンの描写やイメージ形成についても概説する必要がある。サハリンがロシア文学作品の舞台になり始めたのはおおよそ19世紀以降で、当初は渡航者の旅行記や自伝的な記録文学作品がほとんどであった。チェーホフの『サハリン島』(1895)もその流れに位置づけられる作品である。チェーホフは流刑地の調査という名目でサハリンに赴き、監獄や流刑、囚人やサハリンの住民についての詳細な記録を残した。チェーホフ自身が流刑地の調査という目的で渡航したことからも、すでにサハリンは監獄・流刑の島として認識されていたと考えられるが、『サハリン島』の詳細な記録はその認識を強め、サハリンに監獄・流刑の島であるというイメージを植えた。ただし『サハリン島』では、監獄・流刑だけでなく、サハリンの厳しい自然や多様な民族状況についても記述されており、全体としてサハリンは絶望に溢れた地獄のような場所として想起される。チェーホフの『サハリン島』のような作品は以降も発表され、サハリンに関連する1910-1920年代の文学作品の大半は自伝的性格や文書にもとづく証拠をもつもので、これらの作品では気候や天然資源、多様な民族状況が記述されていた。また、チェーホフやドロシエーヴィチのサハリン旅行について総括したり、新時代のサハリンを展望したりする著作もあった<sup>11</sup>。さらに1920年代終わりには新たな潮流すなわち1930年代以降に特徴的

<sup>9</sup> ヴェルキン『サハリン島』p.399(「訳者あとがき」より)。

<sup>10</sup> Буракова Е. Эдуард Веркин «Чехов — бездонный кладезь для любого русского писателя». Интервью с автором романа «Остров Сахалин». [<https://eksmo.ru/interview/eduard-verkin-chekhov-bezdonnyy-kladez-dlya-lyubogo-russkogo-pisatelya-ID15406182/>] (2023/8/29 閲覧)。

な傾向も見られた。それは、社会主義建設のフロンティアとしての極東を想起させるような樂觀的なものであり、文学によって人々（読者）を極東へ志向させるようなプロパガンダ的なものであったという<sup>12</sup>。

1930年代はサハリンにおける社会主義の建設がすすめられた時期であり、それに伴って開発や産業の様子が文学作品にも描かれるようになった。加えて、他者とりわけ日本との対立が、登場人物たちの性格や行動に現れるのも1930年代以降のサハリン関連作品の特徴である。第二次世界大戦直後の時期に書かれた小説はそれほど多くはないが、石油パイプラインの建設現場を描いたワシーリー・アジャエフ『モスクワを遠くはなれて』（1948）、漁業コンビナートの再建を描いたアレクサンドル・チャコフスキー『こちらはもう朝です』（1949）という二つの長編小説が代表的で、どちらもほぼ同時代のサハリンを舞台としている。これらは典型的な生産小説であり、開発や産業の様子が描かれているために、サハリンに開発や産業のイメージをさらに植えつけたと考えられる。加えて、サハリンの自然が開発に利用できるというイメージも強まってくる。一方でこの時期の作品では、監獄や流刑のイメージが想起されることは少ないと越野剛は指摘する<sup>13</sup>。いずれにしろこの時期の作品には最も社会主義リアリズム<sup>14</sup>の傾向が反映されており、極東での労働が描かれ、開発と天然資源の利用の様子が前面に押し出されていたといえるだろう。

1960年代以降、サハリンを舞台にした小説は以前と比べて格段に多くなっている。それもあって、この時期はサハリンの描写やイメージが最も発展し豊かになった時期ともいえる。越野は、作家たちが次第にサハリンに「定住」する人々になったことを指摘し、彼ら定住者はその土地の過去を語ることを好むとした<sup>15</sup>。そのような経緯もあってか、過去の戦争を題材にした小説が発表され、太平洋戦争期の日ソ戦を描いた作品もいくつか見られるようになった。また、これまでの文学作品が来訪者、主に中心からの視点で描かれていたのに対し、サハリンにルーツをもち、いわばマイノリティに位置づけられる作家たちが自分たちの側からサハリンを語り始めた。ニヅフの出自をもつウラジーミル・サンギと、朝鮮系ロシア語作家のアナトーリー・キムがその代表格である。とりわけキムの作品において多様な民族状況と幻想性の結びつ

<sup>11</sup> Литература Сахалина и Курильских островов. Южно-Сахалинск Издательство СахГУ. 2014. С.72

<sup>12</sup> Литература Сахалина и Курильских островов. С.73.

<sup>13</sup> 越野剛「二〇世紀ロシア文学におけるサハリン島」（原暉之編著『日露戦争とサハリン島』所収）北海道大学出版会、2011、p.146.

<sup>14</sup> スターリン体制が確立するなか、1934年のソ連作家同盟第1回大会で決定された芸術の規範、公式の美的規範のことで、社会主義の理想を描くことが求められた。適合しない作品は激しい批判にさらされるようになり、のちに多くの作家らが粛清された（中村唯史、坂庭淳史、小椋彩編著『ロシア文学からの旅 交錯する人と言葉』、ミネルヴァ書房、2022、p.69、101参照）。

<sup>15</sup> 越野「二〇世紀ロシア文学におけるサハリン島」p.148.

きが想定されることや、ルポルタージュやリアリズム的な小説に加えて、幻想性ひいてはフィクション性が強まった作品も現れてきたことが指摘できる。その後、おおむね1990年代から現在にいたるまで、サハリン在住の作家がサハリンの出版社から作品を発表する傾向が強まっている。作家組織や出版基盤が整備されたことで、サハリンにおいてモスクワなどの都市すなわち中心と同じような創作活動が可能になったともいえる。そのため、これまでと同様に、ルポルタージュ的な作品や自伝的な作品、サハリンの歴史的な出来事を題材にした作品に加え、これまでの作品とは異なり、何らかのテーマや思想が先にあって物語が展開され、それがサハリンと結びつけられているような作品や、サハリン以外の場所が舞台になっている作品も見られるようになった。

以上のように概観すると、サハリンを舞台にした文学作品の多くに、監獄・流刑、開発・産業、自然、多様な民族状況が描かれていることがわかる。これらはいわば実際の出来事や状態であると同時に文学作品におけるサハリンの代表的な描写であり、さらにはサハリンについてのイメージをも構成している。もちろんそれぞれの描写は相互に関連しながら変化するものでもある。以下ではこれらの描写やイメージが、ヴェルキンの『サハリン島』でどのように利用もしくは応用されているのかを論じる。

### 監獄・流刑（徒刑）

これまでのサハリン関連作品同様、ヴェルキンの『サハリン島』にも監獄・流刑（徒刑）の様子が描かれており、監獄・流刑の島というイメージが再利用されていることがわかる。この作品において、サハリン島には3つの刑務所がある。ウグレゴルスクにある刑務所〈ウゴリョーク〉は、最古の矯正施設であり、劣化している。もとの収容所を利用してつくられており、維持費をかけずに高い収容力を誇る。鞭打ちを3倍にしたところ脱獄が途絶えた。石炭で寒さをしのいでおり、他の2つの刑務所より遅れている。人間を侮辱する罪を犯した者が収容されている。囚人たちの感情をコントロールし健康にするため、見世物とされているニグロの入った檻が吊り下げられている。出所者の再犯率は他の3分の1とされる。

一方で、アレクサンドロフスクの刑務所〈三兄弟〉は、学校教育でも取り上げられるほど有名な、唯一の特別厳戒体制刑務所で、囚人に枷をはめている。無期懲役者たち、すなわち衝撃的な罪を犯して人権や人智が及ばなくなった囚人がいる。星形配置の3つの小棟と補助施設からなり、建物や塀は軽々しいピンク色である。日中は敷地内が解放されており、最も美しい場所から海を望むことができるため、地元住民が自由に散歩している。監房内の厳しい環境と窓から見える素晴らしい景色のコントラストが強調されている。第一棟の重罪人棟には、人食いや大量殺人犯が収容されている。職員によると、彼らにとっては死刑ですら褒美になってしまうので、まさに地獄に向かっていることを認識させている。彼らは「人間であることをやめて



しまった」<sup>16</sup>者たちである。第二棟には政治犯か過失犯が収容されており、いずれ第三棟に移動することが見込まれている。ある程度の自由が確保されており、囚人たちは窓の外を見たり、読書や彫刻をしたりして過ごす。詩人であり活動家のシンカイシロウもおり、刑務所側に協力するなど矯正の道を歩んでいるという。第三棟は三階建てで、普通の刑務所と同じつくりである。そこにいる囚人は半ば自由の身であり集落に出て活動することができるが、憂鬱さから病気になるって第二棟に戻ろうとする囚人もいる。後に起こる地震の際には、この刑務所から囚人が脱走して主人公らと対峙する。

〈ウゴリョーク〉と〈三兄弟〉からは、かつての監獄もしくは現在の刑務所とそれほど変わらない印象を受けるだろう。しかしながら、ユージヌイ（ユジノサハリンスク）にある〈軽やかな空気〉は、「新しい」特徴をもつ「未来の」刑務所である。身体刑や作業を課す他2つの刑務所とは異なって、〈軽やかな空気〉には拷問器具等はまったくない。シレーニによれば、ここは刑務所らしくなく、「両目を開けたままで見る、苦しい夢」<sup>17</sup>に似ている。このように表現されるのは、かつて収容されていた鬼才チカマツらによってつくられた無秩序で多角形的な配置をした、幾何学的な均衡を破る建物内となっているためである。

どの高さから吊り下げられているのかわからない階段や吹き抜け、多角形の構造物、多角形で構成された監房、まったく予期せぬところから差す光、無数の鎖の組み合わせ——これらすべてが目もくらむような印象を与えた。空間が壊れて拭き取られたように感じ、脳内に歪みが生じ、軽い吐き気がした<sup>18</sup>。

以上のような構造をもつ〈軽やかな空気〉では、不条理と無限が囚人の精神や意識を抑圧し、結果として再犯を防止できているものの、頻繁に入所者が自殺するといった欠点もある。所長いわくサハリンで最も手強い刑務所であり、看守たちは安全のために特殊な眼鏡をかけているが、うっかり内部空間を覗こうとしたシレーニは気絶してしまうほどであった。ここでは身体刑や作業というかたちで改心させるのではなく、建物の構造によって囚人の精神をじっくりと蝕み、犯罪意欲を失わせるという仕掛けが設定されている。

また、樺太県知事によれば、「徒刑とはあなたが自分の周りで見えるものすべて」<sup>19</sup>であり、それがサハリンの主要産業であるという。刑務所だけが刑務所なのではなく、サハリンという島自体がある種の刑務所となっている。同じく樺太県知事はサハリンの特徴について、「帝国社

<sup>16</sup> Веркин Э.Н. Остров Сахалин. С. 162, Велкин 『サハリン島』 p.127.

<sup>17</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 308, Велкин 『サハリン島』 p.242.

<sup>18</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 309, Велкин 『サハリン島』 p.242.

<sup>19</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 71, Велкин 『サハリン島』 p.57.

会の望ましからぬ輩の受け皿になっているのです。殺人者、強盗、変態、精神異常者、その他の悪人など少数であっても社会を破壊しうる者たちの。その一方でサハリンは戦争後大陸から逃げてきた者全員を受け入れ、今も受け入れています」と説明し、「残りの世界に恩恵をもたらすが、地元住民にとっては地獄だと言える」<sup>20</sup> 場所であるとしている。すなわちサハリンは大日本帝国を維持するために、いわば社会にとって不都合な人々を寄せ集めた島である。裏を返せば、サハリンは行き場のない人々の居場所でもある。したがってこの小説においては、サハリンには罪を犯した人々が収容される3つの監獄があり、さらにはサハリンという島自体が帝国にとっての不都合や不均衡を閉じこめておくための監獄となっている。

### 開発・産業

サハリンでは1930年代前後から石油・石炭などの採掘がさかんに行われるようになり、現在に至ってもエネルギー関連事業の中心地のひとつとなっている。小説『サハリン島』にも、サハリンでの開発事業や産業が描かれており、特に未来のエネルギー産業という点については、注目して論じる必要があるだろう。未来のサハリンでは、まず石炭をエネルギー源にした発電が描かれている。石炭の最大供給地であるウグレゴルスクにあるウグレゴルスク・エネルギー・フィールドでは、石炭を燃料にサハリン島の電力需要の四割を供給している。また、ユージヌイでは、ウグレゴルスクからの石炭を原料として火力発電し、ユージヌイの行政府や駐留軍、アニワの軍事基地に常にエネルギーと熱を供給している。これは現在にいたるまでのサハリンの状況やイメージをふまえて考案された特徴であるといえ、さらには石炭が主要燃料であることから、舞台は未来ながら過去のエネルギー産業を想起させる部分でもある。

一方でこの作品で描かれているもうひとつのエネルギー産業として、死体での発電がある。ユージヌイにあるもうひとつの火力発電所では、ゲル重油に浸した乾燥死体を燃料に発電している。外観は一般的な発電所とそれほど変わらない。死体はコンベヤーで焼却炉に投入され、処理工程は事実上完全に自動化されている。担当技師によれば、以下の理由でこの事業は大成功である。

死体を燃料にすることは得策な上、自然に優しい。第一に、死体は出力が同じ場合石炭の一・五倍長く燃える。第二に、戦争後生えた木を燃やすと蓄積された放射性物質が出るが、死体なら出ない<sup>21</sup>。

<sup>20</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 71-72, ヴェルキン『サハリン島』p.58.

<sup>21</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 303, ヴェルキン『サハリン島』p.238.

この発電方法によって「処分に困っている死体を廃物利用できる」<sup>22</sup>のであり、今後島内だけで六十年間分の死体を確保できるために利益も出るということが語られる。これはすなわち、死体によって儲けることができるということでもある。例えばアルチョームとチェークは死体を集めて生活しており、「死体一体につき引換券が一枚もらえる。引換券一枚でジョッキ半分の大麦と交換できる。運が良ければ袋半分の大麦が手に入る」<sup>23</sup>。そのため、死体を集めて儲けようとする人々のあいだで争いが起こることすらある。

また、死体利用は発電だけでない。『サハリン島』では、死体からせっけんをつくる目論見があることも書かれている。

MOB ウイルスは生きた感染者につくが、感染者の心臓が止まった数分後にはウイルスも死ぬ。つまり、サハリンの死者はすべて石鹼作りにそれはそれは役に立つので、私たちは石鹼だらけになって、この先百年は石鹼の心配はなくなるし、この先千年は石鹼を使い続ける運命を背負わされる……<sup>24</sup>。

このように『サハリン島』では、サハリンにおける開発というイメージが利用され、とりわけエネルギー産業に重点が置かれているが、よりグロテスクなエネルギー産業が構想されている。そこでは肉体とりわけ遺体の商業的利用が、未来の人間に課される特徴であると想定されている。デイドロフによれば、とりわけ「全体主義的」なディストピアでは権力側の判断で死体が解剖されたり、臓器や神経などのパーツもすべて取引可能な商品となったりする<sup>25</sup>。『サハリン島』で描かれている、遺体を利用したグロテスクなエネルギー産業はデイドロフの指摘に通じるものがあるだろう。

また、未来のサハリンでは監獄・流刑と開発や産業が強く結びついている。その最たる例がユーヅヌイであり、ここでは刑務所を中心に「独特の小さいがしっかりした活力ある経済圏ができていく」<sup>26</sup>のである。

ユーヅヌイは、刑務所と発電所の町だった——刑務所はそこで働く人々のみならず、関連業務を請け負うたくさんの人々に仕事を与えていた。例えば食品下請け制度——年に二度、刑務所幹部が地元の食品関連業者を対象に刑務所に食品を納入するための入札を行っ

<sup>22</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 303, ヴェルキン 『サハリン島』 p.238.

<sup>23</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 101, ヴェルキン 『サハリン島』 p.80.

<sup>24</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 428, ヴェルキン 『サハリン島』 p.345.

<sup>25</sup> Дыдров А.А. Человек будущего в дистопии. Тело. // Челябинский гуманитарий. 2014. № 1 (26). С. 67.

<sup>26</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 302, ヴェルキン 『サハリン島』 p.237.

ていた。(中略) 最も安い値段で提供する生産者が刑務所の納入業者になっていた<sup>27</sup>。

もちろん監獄・流刑と開発・産業は、労働を介して、サハリンを舞台にした文学作品で以前から結びついてきた。越野によれば、監獄・流刑制度が廃止され、チェーホフの『サハリン島』の記述内容が過去のものとなった1930年代においても、贖罪のための刑罰が行われる場所というイメージは残り、サハリンでの労働の選択といった自発的な懲罰の意味を帯びて再生産されるという<sup>28</sup>。しかしながらヴェルキンの『サハリン島』では、監獄・流刑制度と開発・産業との結びつきがより直接的なものとして描かれていると考えることができるだろう。とりわけユージヌイにおいては、精神的な負荷に特化した「新しい」刑務所、遺体を燃料として利用する「新しい」発電所があり、それを機能させるために町の産業が活発になっているともいえる。これが「独特の経済圏」であり、一方では人間を心身ともに蝕み、他方ではそれによって生かされている人間がいるというグロテスクな状況を生み出している。

## 自然

実際にサハリンが自然に囲まれた島であるのはもとより、特に文学作品においてサハリンの自然が風景描写に生かされることで、サハリンは自然にあふれた島であるというイメージが人々に植えつけられることにもなった。サハリンの自然が描かれる際、特に強調されやすいのは中心すなわちモスクワなどでは見られない自然である。海は必ずと言っていいほど描かれ、他にも山、青々とした背の高い草、霧などがよく描かれる。さらに、そのような自然環境で生育する動植物も描かれ、都市にはない風景が想起される。このように、サハリンは自然にあふれた場所としてイメージされており、文学作品においてはしばしばその自然が風景描写に生かされてきた。小説『サハリン島』にも、これまでのサハリン関連作品に通じるような自然の豊かさが記述されている。

目の前にある山々は軽やかなエメラルドの霧に包まれて揺れていた。少し開けた窓から、降ったばかりの雪の匂いのする涼しい空気が飛び込んできた。道端には花が咲き乱れ、私たちの乗った車が飛ぶように通過する小川の岸辺は青々とした草で覆われていた<sup>29</sup>。

霧や草花はサハリンの風景描写としては頻出のものであり、引用部以外にもサハリンの景観の

---

<sup>27</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 301, ヴェルキン『サハリン島』p.236.

<sup>28</sup> 越野「二〇世紀ロシア文学におけるサハリン島」pp.137-138.

<sup>29</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 205, ヴェルキン『サハリン島』p.160.

良さが描かれている。一方で、豊かであるはずのサハリンの自然が破壊されていることも、この小説の特徴である。サハリンの土地は荒れており、沿岸地域と河川の汚染により水は工業利用しかできない。生態系の破壊や森林伐採も深刻であり、加えて山火事により木材利用もほとんどできない状態である。

サハリンを舞台にした作品において同様によく見られる海については、この作品でさらに興味深い位置づけがなされている。移動性恐水病ともいうように、MOB感染者は水を恐れるという特徴がある。そのことが頭に浮かんだシレーニは、感染者の群れに遭遇したとき、海辺まで出て岸に沿って歩くことをアルチョームに提案する。晴天が続く雨によって感染者を撒くことができないため、堪え凌ぐには絶望的な状況であったところを、海の存在に気づいたシレーニは次のように語る。

[……] それでも美しく、いつまでも眺めていたくなる。なぜなら、海だから。海はすべてを変える、とりわけ晴天の日。そんな日には死までが突然違ったふうに見えるのだ<sup>30</sup>。

海までたどりついたシレーニは、「温かく気持ちの良い、柔らかな水」<sup>31</sup>の日本海に浸かりながら、自分はかなり幸福だと感じる。実際にシレーニの案は功を奏し、「とりわけ大きな波が岸に寄せてくると感染者たちは少し離れ、波が引くと私たちの方へ戻った」<sup>32</sup>というように、感染者が近くにいながらも襲撃されて感染することはなく、その日の夕方にはボートを見つけてサハリンから脱出する準備を整えた。このように、窮地に陥ったシレーニらにとって海は救済の場であったが、最終的にシレーニは海上で大火傷を負い、アルチョームらも海上で浄化ミサイルによって死亡するという破滅の場にもなってしまう。

海が果たす役割からもわかるように、『サハリン島』では、自然は恩恵をもたらすものでもあるが、脅威にもなりうるものであるという二面性が明示されている。例えば地震は、サハリン北部で火事を引き起こすことになるが、シレーニがユージヌイの町なかで耳にした話では、地震による火事の影響すら明るい噂となって流れていた。

北部では火事が猛威を振るい、いくつもの森林地区が全焼しているとの噂もあった。つまり火災で木炭が大量に生まれることでまもなく石炭の値段が下がって楽に冬を越せるとのことだ。北部での水の消費が減るため水も値下がりする<sup>33</sup>。

<sup>30</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 370, ヴェルキン 『サハリン島』 p.294.

<sup>31</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 385, ヴェルキン 『サハリン島』 p.307.

<sup>32</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 388, ヴェルキン 『サハリン島』 p.309.

<sup>33</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 292, ヴェルキン 『サハリン島』 p.230.

すなわち地震やその余波が「文化と経済の中心地であるユージヌイの生活に良い影響を与える」<sup>34</sup>といった明るい展望がささやかれているのである。裏を返せば、これは自然現象や自然破壊によって一部の人間が得をするということでもある。開発の描写においても言及したが、一方の人間は生活が楽になり、他方の人間は苦しむもしくは死に至るという皮肉な状況が描かれている。また、シレーニらもサハリン島での地震をきっかけに、アレクサンドロフスク刑務所から脱走したシンカイら囚人に殺害されそうになったり、大陸から流れてきて広がったMOBの感染者らに襲撃されそうになったりする。調査者として安全に旅することができるはずだったシレーニが、地震を境に危険な出来事に巻き込まれ、最終的にはミサイル攻撃にさらされてしまうことをふまえると、地震によってシレーニの特権的立場が揺るがされたともいえるだろう。サハリンは自然にあふれた島であるというイメージをそのまま利用するだけでなく、自然が破壊されたり人間にとって脅威となったりすることをも描くことで、人間も自然の一部であることが印象づけられている。

### 多様な民族状況

サハリンには多様な出自をもつ人々が住んでおり、その内訳はロシア人の他に、ウクライナ人、朝鮮人、ベラルーシ人、タタール人、ニヅフ、ウィルタ、ナナイ、エヴェンクその他であるとされる<sup>35</sup>。同時に、サハリンを舞台にしたさまざまな文学作品に彼らが描かれてきたことによって、サハリンには多様な民族状況が見られるというイメージや、サハリンは多様な出自をもつ人々が住んでいる島であるというイメージが形成されてきた。ヴェルキンの『サハリン島』に出てくる人々も例に漏れず多様であり、これはサハリンを舞台にした文学作品の特徴によくあてはまっている。また、人々の階層グループについては、徒刑囚、条件付き自由民、自由民となっており、チェーホフの『サハリン島』とも共通している。ヴェルキンの『サハリン島』には、多数の日本人、少数のロシア人、差別される中国人やコリアン、憶測によって恐れられているアイヌ、さらには〈バケツ族〉〈手押し車族〉〈鋸族〉という集団も現れることから、サハリンが多様な出自の人々ひいては寄せ集めの島であるというイメージをヴェルキンは利用しており、さらに強化しているとも考えられる。

『サハリン島』に出てくる階層グループと主な民族や集団の関係性は以下のとおりである。第一グループの徒刑囚は全員が日本人であり、階層グループのなかでは最も少数で、刑務所もしくは集落で服役している。なかでも重罪を犯した徒刑囚は、罪の重さによって異なる重さの

---

<sup>34</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 292, ヴェルキン『サハリン島』p.230.

<sup>35</sup> 在ユジノサハリンスク日本国総領事館 HP 参照

[[https://www.sakhalin.ru.emb-japan.go.jp/itpr\\_ja/sakhalin.html](https://www.sakhalin.ru.emb-japan.go.jp/itpr_ja/sakhalin.html)] (2023/08/29 閲覧).

バケツを持ち運ばなければならないため、〈バケツ族〉と呼ばれている。第二グループの条件付き自由民は最も多いが、定職に就いているのはわずかである。刑期を終えた元徒刑囚が中心であり、島に来た中国人、その他コリアンやそれ以外の民族は少数である。徒刑囚であった〈バケツ族〉が、条件付き自由民となって結成し始めた〈バケツ族〉は、事実上全員日本人で精力的に不法な仕事をしている。その急先鋒には〈七三一部隊〉があり、樺太を帝国から切り離して全体主義共和国をつくり、非日本人を労働家畜の地位に引きずり下ろそうとしている。第三グループは自由民であり、その多数が日本人で、県の官僚や刑務所の管理職、技術者や軍人などである。彼らは雇用や派遣または半自発的な流刑としてやってきた人々で、天皇の権力を行使して島を監視している。ロシア人もこの階層に属し、戦後の無秩序状態を抑えるために結成された自称〈手押し車族〉、それにかわって現れた、武器を用いることができる警察のような組織で、治安維持や公共サービスの役割を与えられた〈鋳族〉などはロシア人の集団である。その他、刑務所内や街角で見世物とされているニグロや、日本人への復讐を企てていると噂されていたが脱走した囚人たちに惨殺されてしまうアイヌなどが登場する。

また小説には、これらの民族や集団と差別の問題が描かれている。基本的には、サハリン島や本土において多数の日本人が中国人やコリアンを差別しているという構造である。他にも、見世物にされるニグロなど、小説が展開される社会とりわけサハリン島では差別があたりまえのものとなっている。また、これらの差別に対して異を唱える者はおらず、むしろ被差別者を目の敵にしている登場人物もいる。一方で、必ずしも少数者が被差別者であるというわけではない。例えば、この小説においてアルチョームなどロシア人はかなりの少数者だが、日本人と同じように自由民である。主人公のシレーニも日本とロシア両方のルーツをもつ人物だが、差別されたり生きづらさを抱えたりしているわけでもなく、むしろ差別することのほうが多い。さらに、体制側のシレーニによって語られることで中国人やコリアンらが被差別者として表象されたり、「語るができない」存在になったりしている側面もある。一方で、シレーニが必ずしも体制側であり続けるわけではない点も興味深い。シレーニたちは、アルビノの少年であるヨルシヤコリアンの少年少女を庇いつつ、サハリンを脱出しようとする。身分上、自身は無条件で救助船に乗ることができたにもかかわらず、ヨルシヤコリアンの子どもたちは乗船できないと知ったシレーニは別の船に移り、最終的に悲惨な目に遭うこととなる。とりわけ特権をもつ人がいる世界では、生死にかかわるような重大な出来事が起こったとき、被差別者ひいては他者は情け容赦なく切り捨てられる。最終的に切り捨てることをしなかった（切り捨てられなかった）シレーニは、極めて危険な状況に身を晒すことになるという皮肉な状況が描かれている。

## 日 本

日本（人）もサハリンの多様な民族の構成要素のひとつであるに違いないが、ヴェルキンの『サハリン島』では、サハリンが日本領となっており、日本人ないし日本という国が物語世界の中心となっているため、ここでは日本人や日本の要素がどのように描き出されているかを検討する。ヴェルキンは日本についても非常に興味があり、特に芥川龍之介の作品やその他日本の映画やアニメに幼い頃から親しんでいた。日本が黙示録を生き延びるという特権的な立場に置かれているのはなぜかという問いに対し、ヴェルキンは日本文学に興味があることをあげ、「作者の恣意性です」<sup>36</sup>と答えている。そして、「日本は最も身近な存在です」<sup>37</sup>とも述べている。また、他のインタビューでも日本（人）が残ったことについて、「いや、他に誰がいるというのか。サハリンに最も近いのだから」<sup>38</sup>と答えており、作者の興味関心と地理的な要因の両方から日本が導き出されたといえるだろう。この作品では大日本帝国や鎖国体制など、いわゆる日本史の流れがふまえられている部分も見られる。また、天皇や元号などによっていかにも「日本らしい」雰囲気が出ている点もある。このように過去の日本が想起されるという点ではロシア人の作者から見た日本が描かれているともいえるが、この作品において「日本らしさ」や日本の歴史はパロディとして用いられているのであり、大日本帝国やそのイデオロギーをそれらしく見せかける仕掛けなのである。すなわちロシア人である作者が（未来の）日本を描き出すことができているのは、作者自身が日本の歴史的出来事や制度などを知ったうえで小説に落としこむことができているためでもあるが、『サハリン島』がフィクションであるゆえに可能になっているともいえよう。ヴェルキンは「日本らしさ」という仕掛けをも利用して、近未来の作品世界を創造しているのである。同時に、「日本らしさ」という仕掛けの導入は、ヴェルキン自身の関心によって生まれた趣向でもある。

越野によれば、1930年代のサハリン関連の文学作品に現れる日本人は、サハリンに悪影響を及ぼした侵略者（とりわけ当時の状況から石油事業関係者）として描かれることが多い。日本人は本来そこにいるべき住民ではなく、政治的には敵対者、文化的には異質な他者の役割を与えられる<sup>39</sup>。この傾向は樺太戦前後を描いた作品でより顕著になり、とりわけ日本兵は狡猾で残忍な「サムライ」として恐れられたり憎まれたりする。一方で、日本という異国や異文化に

---

<sup>36</sup> Лебедеenko С, Сорокина А. Эдуард Веркин: от «Острова Сахалина» до гоголевского камина. [https://mnogobukv.hse.ru/news/229202566.html] (2023/8/29 閲覧).

<sup>37</sup> Лебедеenko и др. Эдуард Веркин: от «Острова Сахалина» до гоголевского камина (前注 36 参照).

<sup>38</sup> Крутогорова Д. «Остров Сахалин» от Чехова до Веркина. Что открывают писатели, которые побывали там, где восходит солнце. [https://godliterary.ru/articles/2018/11/29/ostrov-sakhalin-yeduarda-verkina] (2023/8/29 閲覧).

<sup>39</sup> 越野「二〇世紀ロシア文学におけるサハリン島」p.134.



対するある種の憧憬のようなものも見られ、例えば樺太戦直後のサハリンでの日本人とロシア人の共同生活を描いたゲンナジー・マシュキンの『青い海、白い船』(1965)という作品では、日本人女性や日本文化の美しさが過度と思われるほどに強調されている。このように、サハリンを舞台にしたロシア文学作品の多くで日本に関する記述・描写が見られることから、サハリンを含む極東において領土を接してきた日本について、ロシア(ソ連)はその異質性に良い意味でも悪い意味でも関心を抱き、文学作品において異国性や異文化性を描き出してきたといえる。

しかしながら、ヴェルキンの『サハリン島』では、サハリンにおける日本(人)は特別なものではない。それは、すでに島全体が日本領であり、それどころかこの世界にロシアという国家が存在せず、ロシア人も十数人しか存在しないからである。このような世界において、ロシア人と日本人は協力・友好関係にあり、数少ない生き残りのロシア人は日本政府のもとで完全な自由が保障されている。また、このような世界を描き出すにあたって、ヴェルキンはロシア(人)を有標のものとしている。彼らは金髪で青い目をもつ人々として表象され、ロシア語やロシア文化もシレーニにとっては祖母や母の懐かしい思い出として描かれている。そしてそれはロシアにルーツをもつ人々同士の同胞意識にもつながる。シレーニは「同胞」としてアルチョームを紹介され、実際に彼を見て「男は私の同胞だった。ロシア人だったのだ」<sup>40</sup>と語る。またアルチョームも、

そしてなぜだかもっと青くなった。つまりその目は今、海よりも青かった。たぶん俺はあの娘の目を丸々一時間でも見ていられるだろう。なぜならあんな目を他に見たことがなかったからだ<sup>41</sup>。

とシレーニの青い目に見入っており、サハリンにいる他の人々とは異なるシレーニについて、「ずっと知っていた」「俺たちは一緒だった」<sup>42</sup>と語っている。『サハリン島』の世界においては、ロシア人やロシアにルーツをもつ人々がごく少数で珍しいゆえに、ロシア(人)に異国性・異文化性が付与され、さらには彼らの間での同胞意識にもつながっているといえるだろう。ただし、サハリン島は日本領ながらも本土とはまた別の空間であり、それは島自体が帝国の不都合や不均衡を閉じこめておく監獄となっていることや、「樺太における時間は内地とは別の特徴を持っているような気がする」<sup>43</sup>というシレーニの記述からも読み取ることができるというこ

<sup>40</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 78, Велкин 『サハリン島』 p.63.

<sup>41</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 397, Велкин 『サハリン島』 p.318.

<sup>42</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 398, Велкин 『サハリン島』 p.318.

<sup>43</sup> Веркин. Остров Сахалин. С. 257, Велкин 『サハリン島』 p.203.

とも添えておきたい。すなわち、近未来のサハリンは「日本ではあるが日本ではない場所」なのである。

## サハリンという時空間と『サハリン島』の時空間

ここまで、サハリンに特徴的な描写やイメージがヴェルキンの『サハリン島』でどのように生かされているかを論じてきたが、これらの各描写やイメージをより包括的に、すなわちサハリン表象として捉えることも必要である。そのために参照したいのが、ゴルニツカヤらによる島の時空間理論である。そもそも文学作品における時空間とは、バフチンが提唱した理論であり、文学において時間と空間が結びついたある特殊なジャンルの形式がある<sup>44</sup>という考え方である。バフチンの時空間（クロノトポス論）は以下のようなものである。

文学における時空間の場合、空間的特徴と時間的特徴とは、意味を付与された具体的な全体の中で融合する。時間は、凝縮されて密になり、芸術化され可視的になる。空間も、集約されて、時間・話の筋・歴史の展開のなかに引き込まれる。時間的特徴が、空間の中でみずからを開示し、空間は、時間によって意味づけられ計測される。文学における時空間を特徴づけるのは、両種の系列のこうした交差、双方の特徴のこうした融合である。

文学における時空間は、文学の各ジャンルを決定するうえで本質的に重要な意義をもつ。なぜなら、ジャンルのあり様を決定するのも、一ジャンル内の各下位ジャンルを決定するのも、まぎれもなく時空間だ、と端的にいえるからである<sup>45</sup>。

ゴルニツカヤはこれを応用して島の時空間理論を提唱した。島とはそれぞれ個別化されたものではなく、類型化されたものである<sup>46</sup>ために、島を描いた作品のテキストでは島のイメージが共通の意味合いをもち、また多くの模倣を生み出したことで島のジャンルすなわち島の時空間を強化することとなった<sup>47</sup>。したがって、島（作品）というもある種のジャンルの形式である

---

<sup>44</sup> Бахтин М.М. Формы времени и хронотопа в романе Очерки по исторической поэтике. // Литературно-критические статьи. М., 1986. С. 121-122.

<sup>45</sup> ミハイル・バフチン（北岡誠司訳）「小説における時間と時空間の諸形式——歴史詩学概説」（ミハイル・バフチン（伊東一郎 [ほか] 訳）『ミハイル・バフチン全著作 第5巻「小説における時間と時空間の諸形式」他：一九三〇年代以降の小説ジャンル論』所収）水声社，2001，p.144.

<sup>46</sup> Горницкая Л.И. Мифологема острова в русской культурной традиции // Проблемы истории, филологии, культуры. 2010. С. 151.

<sup>47</sup> Горницкая Л.И., Ларионова М.Ч. Место, которого нет... Острова в русской литературе. ЮНЦ РАН. 2013. С. 67.

と考えることができる。ゴルニツカヤによれば、このような島の時空間において、楽園と地獄、生と死などの相反するものは混在する<sup>48</sup>。また、ゴルニツカヤは島を舞台にした文学作品にはある種のジャンルの形式があるとした。彼女によれば、島の物語も口承文芸から近代文学へと継承され統合されたため、島とはそれぞれ個別化されたものではなく、類型化されたものとなる<sup>49</sup>。そして、島を描いた作品のテキストでは島のイメージが共通の意味合いをもち、多くの模倣を生み出したため、島のジャンルすなわち島の時空間を強化することとなった<sup>50</sup>。したがって、文学作品において島は時空間として類型化されており、作家はすでに類型化された島のイメージをもって現地に行き、それを実情と合わせて変形しつつ個別化し、作品として表現しているということができるのである。これをふまえると、サハリン表象も変形を伴いつつ強化されるという形成の過程をたどっている。

サハリンのイメージ形成に最も影響を与えたとされるチェーホフも、島のイメージをもってサハリン島に向かったうえで実情と合わせた詳細な記録を残した。それが島の時空間というジャンルの形式を一方では個別化し、一方ではそれを類型化したともいえる。すなわち島の時空間のなかでもサハリンの時空間（サハリンというジャンルの形式）を確立する一方で、作品によって島もしくはサハリンというジャンルの形式を強化したのである。これはチェーホフだけでなく他の作家やその作品においても同様であり、ジャンルの形式に伴ってイメージも個別化と類型化を被った。ヴェルキンは2012年にサハリン島南部を旅行しており、それをきっかけに本作を構想し始めた。これをふまえると『サハリン島』の作者ヴェルキン自身も、何らかのサハリンもしくは島のイメージの影響を受けて来島し、小説を書いたはずである。そのため『サハリン島』も島もしくはサハリンの時空間に連なる作品であり、島もしくはサハリンというジャンルの形式を強化しているといえる。一方でヴェルキンはこのような時空間をも作為的に利用している。『サハリン島』の大部分は来訪者シレーニの一人称小説である。以上のような時空間の観点を応用すれば、シレーニ自身もサハリンもしくは島イメージを抱いたうえで来島しており、そのうえで島の実情と合わせたサハリンの様子やそこでの出来事を一人称で語っているという設定になっている。ヴェルキンは自身が時空間の形成や強化に参加するだけでなく、時空間の形成や強化の過程をも作品に利用しているのである。

なお、バフチンの提起した時空間という概念は単にジャンルの形式すなわち文学理論の枠に収まらず、時間と空間の不可分な結びつきという、より「自然科学的な」意味合い<sup>51</sup>でフィクション作品とりわけSFジャンルに取り入れられている側面もある。『サハリン島』においても

<sup>48</sup> Горницкая. Мифологема острова в русской культурной традиции. С. 154-155.

<sup>49</sup> Горницкая. Мифологема острова в русской культурной традиции. С. 151.

<sup>50</sup> Горницкая и др. Место, которого нет... Острова в русской литературе. С. 67.

<sup>51</sup> バフチンによれば、時空間とはもともと自然科学分野の概念であり、彼はそこから文学に導入したという。

この傾向が見られる。すなわち、サハリンという空間と、過去・現在・未来という時間の結びつきである。いわば「地獄」であるサハリンという空間では、過去も現在もほとんど溶け合っ  
てしまい、それゆえにサハリンにおける時間は人間を壊しているとシレーニは語る。日本（本  
土）と比較してサハリンという時空間が特殊なものとして設定されており、かつサハリンの時  
空間はグロテスクなものであるということが出来る。一方で、サハリンは未来もしくは「楽園」  
とも結びつけられる。シレーニは未来について研究し未来を認知する応用未来学の専門家であ  
り、絶望が支配する地獄のようなサハリンでこそ未来を感じられる、と上司に渡航を勧められ  
た。前述のとおりサハリンは地獄であり絶望に支配されているが、一方でシレーニをはじめと  
した登場人物たちは未来に何らかの希望を抱いている。加えて、未来においてさらにその先の  
未来を見据えている、すなわち読者からすれば「未来の未来」に思いを致すような構造になっ  
ている点もこの小説の特徴であるといえる。さらに、複数の異なる語り手によるそれぞれの物  
語が断片的に挿入されている一方で、各語り手は現在のサハリンにおいて出会っているために、  
それぞれの物語がサハリンという時空間において連続性をもっているのである。

### 現代文学としての『サハリン島』

ここまで、従来のサハリン関連文学作品との関係性のなかで『サハリン島』を読み解いてき  
たが、この小説が現代文学であり、とりわけポストモダニズムの傾向をもつ作品であることにも  
留意する必要がある。このポストモダニズムの傾向のなかで多く生産・受容されるようにな  
ったのが、SF ジャンルとりわけディストピアや黙示録ジャンル、すなわちアポカリプスもし  
くはポストアポカリプスである。特に世界の終末を描いた黙示録ジャンルは、チェルノブイリ  
原発事故からソ連崩壊、チェチェン紛争、さらにはクリミア併合などを経験したロシアやその  
周辺地域において強く意識されるようになっていた。ヴェルキンの『サハリン島』は、舞台こ  
そサハリンであれ、こういった潮流を少なからず受けていると考えられる。よってこの作品を  
読み解く際、サハリン表象の系譜だけではなく、ディストピアや黙示録的な要素、それらとサ  
ハリン表象との結びつきをも視野に入れる必要がある。

ディストピアというジャンルの定義は未だに不明確であるが、ディストピアとされる作品の  
共通点を鑑みると、ディストピアとは暗澹たる社会、とりわけ行き過ぎた管理社会やその歪み  
を描くジャンルであるといえよう。『サハリン島』で描かれている世界はたしかに暗澹として  
いる。また、核戦争で生き残った日本では帝国主義が復活しており、監獄や徹底的な感染症浄  
化など、ともすれば管理社会的な側面があるのかもしれない。しかしながら、ディストピアと  
される作品にありがちな言論、思想、生殖、情報などの徹底管理が明確には見られないことも  
あり、日本が管理社会であるという印象はそれほど強くない。また、主な舞台となるサハリン  
島は、反対に管理しきれていないような無法地帯に成り果てている側面がある。ただし、文学

とりわけ小説が廢れたものとされていたり、差別や排除が当然のように行われる社会が疑問視されていなかったりするという点ではディストピア的である。

ポストアポカリプスとは主に大規模な災禍が起こったあとの社会を描くジャンルである。ときにアポカリプスのサブジャンルとされることもあるが、両者が異なるジャンルに位置づけられることもあるのは、アポカリプスでは終末的な出来事とそれに至るまでの状況に焦点が当てられ、その後の生活については若干の推敲が加えられる一方、ポストアポカリプスではその余波と新しい社会秩序の構築を想像することに最も関心が払われる傾向があるためである<sup>52</sup>。ヴェルキンの『サハリン島』は言うまでもなく黙示録ジャンルに位置づけられる作品であるが、この小説世界においてはアポカリプスとポストアポカリプスが同時に見られる。北半球の主要国が核戦争によって消滅してしまった後の世界を描いたという点では典型的にポストアポカリプス的な作品である。一方で、MOB という感染症の拡大と大地震によって新たな脅威が訪れているという点ではアポカリプス的な作品でもある。これらの出来事は、最後の核によって感染症が表出し、大地震によってサハリンにも感染症が流れ込むというかたちで連動している。すなわち、破壊が破壊を引き起こし、ポストアポカリプス的な世界で再びアポカリプス的な出来事が生じるのである。さらにそのような世界で、被差別者や感染症罹患者に対する差別や排除の横行が見られる。黙示録のイメージについて論じた岡田温司によれば、黙示録的思想はときに「不寛容と暴力を扇動するものでもある」<sup>53</sup>。もちろん、これはディストピアと（ポスト）アポカリプスの共通点と捉えることもできる。

差別や排除の横行という共通点からもわかるとおり、実際にはディストピアとアポカリプスもしくはポストアポカリプスのジャンルの関係性をはっきりと定義することはできず、さらには狭義のSFやユートピアなどの近接ジャンルも含めると、より複雑で重なり合い、ときには互いを内包し合うような関係性が見られるだろう。『サハリン島』についても例外でなく、ディストピア的ということもポストアポカリプス的ということも、それどころか楽園が示唆されていることからユートピア的な部分もあるということすらできるのである。よって、内容はもとよりジャンル性についても混沌としているが、これこそが『サハリン島』の特徴でもあり、現代文学の特徴のひとつでもある。そしてヴェルキンの『サハリン島』は、従来のサハリン表象をも活用しつつ、サハリンとディストピアや黙示録ジャンルを結びつけた作品である。もちろん、島という境界性や、島ジャンルにおける相反するものの表裏一体性がこれらのジャンルと結びつきやすいことは十分考えられるが、クルトゴロヴァも「美しい自然で知られるサハリン

<sup>52</sup> Julia Gerhard, *Post-Utopian Science Fiction in Postmodern American and Russian Literatures* (University of Colorado Boulder, 2008), p.188.

[[https://scholar.colorado.edu/concern/graduate\\_thesis\\_or\\_dissertations/kh04dp73w](https://scholar.colorado.edu/concern/graduate_thesis_or_dissertations/kh04dp73w)] (2023/8/29 閲覧).

<sup>53</sup> 岡田温司『黙示録——イメージの源泉』岩波新書、2014、p.iv.

島を、恐ろしい黙示録的世界の主要舞台として選んだことは、これまでで最も独創的な決定のひとつ<sup>54</sup>と評しているように、あえて核戦争後の未来のサハリンを創造し描き出したことは『サハリン島』の特徴でもあり、さらにはサハリン関連作品の新たな特徴にもなる可能性を秘めている。

また、現代文学の潮流という点では、作品創作にあたっての、他メディアからの影響についても指摘する必要がある。この作品には映画やアニメ、ゲームなど、とりわけ映像作品からの影響やそれとの類似性が見られる。例えば、この作品で描かれる容赦ない銃撃戦や敵の殺害は一部のハリウッド映画やシューティングゲームを連想させるだろう。こういった容赦のなさは、終末もしくは終末後の世界と結びつけられやすい。岡田によれば黙示録テキストや黙示録的思想は切迫感を生み、外部の脅威とされるものへの排除や暴力につながる危険性をも秘めているという<sup>55</sup>。とりわけ誰が(何が)アンチキリストかという論争はたびたび生じており、現実問題として他者に対する不寛容を生み出すこととなった。このことについて再び岡田の説明を借りれば、人々は自分と敵対する人物や陣営をアンチキリストに投影させてそれとの戦いに熱狂してきたのであり、こうしてイメージのイメージよる黙示録の戦争が拡大しているのである<sup>56</sup>。『サハリン島』においても、自らの安全と権益のために、特権をもつ人物たちが徹底的に被差別者や感染者を痛めつけており、裏を返せばそのような場面が読者に映画やゲームなどを連想させるともいえる。このように、各メディアはそれぞれ影響を与え合っており、以前にも増してさまざまなメディアが世界中を飛び交う現代に至っては、影響の方向性もより複雑化している。『サハリン島』の創作過程においても、国・地域や種別を越えた、さまざまなメディアが影響しているだろう。『サハリン島』における従来のサハリン表象をふまえた「未来の」特徴も、それ以外の特徴も、作者のなかで他のメディアの影響も受けつつ創造されたのである。

## おわりに

本稿では、ヴェルキンの『サハリン島』において、サハリンについてのこれまでの描写やイメージがどのように利用されているかを論じ、この作品を例にしながらサハリン表象の形成について考えてきた。『サハリン島』では、これまでのサハリン関連作品同様、監獄・流刑、開発・産業、自然、多様な民族状況についての描写が見られ、従来の描写やイメージの特徴も利用されつつ、人間の身体や精神を蝕むようなグロテスクな特徴が考案されており、全体として混沌

---

<sup>54</sup> Крутоголова Д. «Остров Сахалин» от Чехова до Веркина. Что открывают писатели, которые побывали там, где восходит солнце.

[<https://godliterary.ru/articles/2018/11/29/ostrov-sakhalin-yeduarda-verkina>] (2023/8/29 閲覧).

<sup>55</sup> 岡田『黙示録——イメージの源泉』pp.78-79.

<sup>56</sup> 岡田『黙示録——イメージの源泉』p.199, 211.

とした世界観が形成されている。また、日本については、過去の出来事やイデオロギーが再利用されつつも、敵対や異質性というような従来の意味合いは、ロシアという国家が消滅し日本が唯一の主要国であるという小説の設定を受けて、変化を被っているといえるだろう。この小説で描かれるサハリンも楽園と地獄双方の意味合いを含んでおり、島のジャンルの形式に連なる作品であるが、ヴェルキンはこのようなジャンルの形式の形成の過程をも利用している。また、文学における時空間だけでなく、SFジャンルによく見られる自然科学的な意味合いでの時空間も作品に導入されており、小説で描かれる世界や小説そのものを混沌とさせている。先にも述べたように、全体として整然としない、むしろカオスが支配しているような作品であるが、サハリンに特徴的な描写やイメージという点から読解することで、多かれ少なかれ小説の世界観を見通すことが可能になるだろう。

ヴェルキンの『サハリン島』の世界観やそこで見られる特徴は、従来のサハリンの描写やイメージの延長もしくはそれらの利用によって形成されたものであるため、従来のサハリン関連作品やサハリン表象と連続したものであるということが出来る。同時に、ポストモダニズムの潮流や他メディアの影響を受けていることも想像に難しくなく、その過程で従来の作品や表象とは異なる部分も生まれたのであり、それこそが『サハリン島』という小説の独自性であると考えられる。一方で、このような独自性、すなわち近未来やディストピアもしくは黙示録的世界観との結びつきは、サハリンの「新しい」特徴になるかもしれない。これを踏まえると、サハリン表象に限らず、表象は「現実」と「虚構」、生産と受容が交差するなかで、絶え間なく生み出されているといえるだろう。だからこそ、常に連続と変化を伴って形成されていく表象に対し、通時的かつ共時的な視点でアプローチをくりかえしていく必要がある。

(おおたに りの・欧米文学研究室)

## 書 誌

### 一次文献

Веркин Э.Н. Остров Сахалин. М., 2018.

エドゥアルド・ヴェルキン（北川和美・毛利公美訳）『サハリン島』河出書房新社，2020年。

### 二次文献

※インターネット上の文献については2023/08/29に確認のため閲覧した。

Бахтин М.М. Формы времени и хронотопа в романе Очерки по исторической поэтике. // Литературно-критические статьи. М., 1986. С. 121-290.

Буракова Е. Эдуард Веркин «Чехов — бездонный кладезь для любого русского писателя». Интервью с автором романа «Остров Сахалин».

[<https://eksmo.ru/interview/eduard-verkin-chekhov-bezdonny-kladez-dlya-lyubogo-russkogo-pisatelya-ID15406182/>]

Горницкая Л.И. Мифологема острова в русской культурной традиции // Проблемы истории, филологии, культуры. 2010. С. 150-156.

Горницкая Л.И., Ларионова М.Ч. Место, которого нет... Острова в русской литературе. ЮНЦ РАН. 2013.

Дыдров А.А. Человек будущего в дистопии. Тело. // Челябинский гуманитарий. 2014. № 1 (26). С. 63-72.

Крутогорова Д. «Остров Сахалин» от Чехова до Веркина. Что открывают писатели, которые побывали там, где восходит солнце.

[<https://godliterary.ru/articles/2018/11/29/ostrov-sakhalin-yeduarda-verkina>]

Лебедевка С, Сорокина А. Эдуард Веркин: от «Острова Сахалина» до гоголевского камня.

[<https://mnogobukv.hse.ru/news/229202566.html>]

Литература Сахалина и Курильских островов. Южно-Сахалинск Издательство СахГУ. 2014.

Невский Б. Эдуард Веркин. «Остров Сахалин». Постапокалиптическое путешествие со слабым привкусом надежды.

[<https://www.mirf.ru/book/eduard-verkin-ostrov-sahalin/>]

Julia Gerhard, *Post-Utopian Science Fiction in Postmodern American and Russian Literatures* (University of Colorado Boulder, 2008).

[[https://scholar.colorado.edu/concern/graduate\\_thesis\\_or\\_dissertations/kh04dp73w](https://scholar.colorado.edu/concern/graduate_thesis_or_dissertations/kh04dp73w)]

天野尚樹「サハリン流刑植民地のイメージと実態—偏見と適応—」『境界研究』1巻, 2010年, 113-144頁。

岡田温司『黙示録—イメージの源泉』岩波新書, 2014年。

越野剛「二〇世紀ロシア文学におけるサハリン島」(原暉之編著『日露戦争とサハリン島』所収) 北海道大学出版会, 2011年。

中村唯史, 坂庭淳史, 小椋彩編著『ロシア文学からの旅 交錯する人と言葉』ミネルヴァ書房, 2022年。

ミハイル・バフチン(北岡誠司訳)「小説における時間と時空間の諸形式—歴史詩学概説」(ミハイル・バフチン(伊東一郎[ほか]訳)『ミハイル・バフチン全著作 第5巻「小説における時間と時空間の諸形式」他:一九三〇年代以降の小説ジャンル論』所収)水声社, 2001年。

在ユジノサハリンスク日本国総領事館 HP

[[https://www.sakhalin.ru.emb-japan.go.jp/itpr\\_ja/sakhalin.html](https://www.sakhalin.ru.emb-japan.go.jp/itpr_ja/sakhalin.html)]



